「思い直してくださる神」　エレミヤ２６：１－２４　2025,1,19　　札幌発寒教会

古賀　清敬

今日の箇所は、１節に「ユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの治世の初めに」とあるように、前の２５章（ヨヤキム王の第４年）よりもさらに３年ほど過去にさかのぼって起こった出来事が語られています。これまでも段々さかのぼって語られてきましたが、このヨヤキム王の時代までさかのぼって（前６０９－５９８年の１１年ほど）、それがユダに対する神の裁きを招くか否かの、いかに大事な最期の猶予期間であったか、ということを確認させるためであると思われます。

エレミヤが語るように示された場所は「主の神殿の庭」で、「礼拝に来るすべての者」に対してでした。これはエレミヤ書第７章に記されている「神殿説教」と同じ機会であったと考えられています。そうだとすると、７章では語られた内容に重点がおかれ、ここではそれを聞いた人々の反応、緊迫したいきさつの方に重点が置かれています。

４節、5節で告発されている民の罪は「わたし（主なる神）に聞き従わず」、「律法に従って歩まず」、「預言者たちの言葉に聞き従わない」と簡潔に指摘されています。言い換えれば、神との交わりから離れ、神の御心を行わず、それを指摘し警告した預言者たちにも聞こうとしなかった、と宣告されています。

ちなみに７章では、「お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、みずから災いを招いてはならない」（７：５，６）と、詳しく具体的に指摘されています。その社会で弱く不安定な境遇におかれている人々の尊厳と権利とを守るかどうかが、その社会の存亡にかかわる重要課題であること。また「異教の神々に従う」とは、単に宗教的意味のみでなく、実際には経済的繁栄や軍事的優勢が命と生活とを保障するかのように求めて、大国に依存する「服属儀礼」を意味してもおります。

さて、神による刑罰についても、７章と同じように今日の２６章でも繰り返され、かつての中央聖所であったシロが破壊されたように、主の神殿とエルサレムの町が破壊されるという衝撃的なものでした。

これを聞いた「祭司と預言者たちとすべての民」は、エレミヤの言葉は神殿を冒涜しエルサレムを侮辱するもので、死刑に処せられなければならないと、エレミヤを捕らえて裁判にかけようとしました。この報告を受けて、王の高官たちが主の神殿に駆けつけ、裁判が行われました。エレミヤを訴えたのは「祭司と預言者たち」で、「高官たち」が裁判官、「民のすべての者」が立会人として判断する側でした。

祭司と預言者たちが訴えた理由は、エレミヤが都に敵対することを預言したから、という単純な反感からでした。これに対するエレミヤの弁明は、まず神が自分を遣わされたこと、そして悔い改めるなら神は災いを思い直してくださるかもしれないと勧め、最後に自分は

死を覚悟しているが、もし殺すなら無実の者の血を流した罪を負うことになるのはわきまえておきなさい、というものでした。
　この弁明を受けて、高官たちと民のすべての者は、訴えた祭司と預言者たちに対して、エレミヤが確かに主の名によって語っていると判断し、エレミヤの無罪を主張しました。それはエレミヤが自分の身をさらして命がけで語っている毅然たる態度もあったと思われます。

　それに続いて、「この地の長老」と呼ばれる人々が数人立ち上がり、エレミヤが語った内容に触発されて思い起した出来事を、民の全会衆に向かって語りました。かつて預言者ミカがヒゼキヤ王の時代に同じような災いの預言を行ったが、王も民も彼を殺さないで、悔い改めて主の恵み（赦しと憐れみ）を祈り求めたので、主は災いを思い直してくださったではないか、ということでした。ヒゼキヤ王はこの当時から百年ほど前の時代であり、長老と呼ばれる人々は民の指導者として、過去の出来事を大事に記憶し受け継いできた人々でもありました。わたしたちは今起こっていることを、過去のいきさつをふまえてではなく、単発的に輪切りに捉えて、一方的で感情的な正義感に流されやすいのではないでしょうか。また自分に都合のよい事柄ばかり集めたりしやすいものです。とくに強い立場の人々に都合の良い偽りの物語があふれています。それがわたしたちも将来の世代も、間違った判断へと追い込んでいきます。ですから、素朴な疑問を大事にして過去の実態をできるだけありのままに調べ直し、世代を超えて「真実」（真理と事実）を引き継いでいくことの大切さを、この「民の長老たち」の働きは示しています。

　この「民の長老たち」の説得力ある演説で、ひとまずエレミヤは無事だったようですが、それで命の危険が無くなったわけではなく、エレミヤとまったく同じことを預言していたウリヤという預言者が、当時のヨヤキム王によって殺された事件が告げられています。ウリヤはヨヤキム王が自分を殺そうとしているのを恐れて逃亡したのが逆に裏目に出て殺されてしまいました。ただし、ウリヤを批判するような趣旨で語られているのではありません。エレミヤが毅然とした態度で語ったという違いもありますが、それだけでなく、シャファンの子アヒカムという高官が彼を保護したことで、かろうじて命が守られたという厳しい状況が示されています。シャファンという人は、名君ヨシヤ王の書記官でして、その子であるアヒカムもまたヨシヤ王に信頼された高官で、ヨシヤ王の子ヨヤキム王に続けて仕えてきた高官でしたので、発言力があったと思われます。このような主を畏れる信仰の繋がりによってエレミヤが守られたという、神の不思議な導きが示されていると言えます。
　それとともにここで明らかにされているのは、ヨヤキム王がはじめから神の言葉に聞こうとせず、神の言葉を告げる預言者に対して徹底して残酷な仕打ちを行い、罪なき者の命を奪い、罪に罪を重ねたという事実です。

　今日の箇所で、三度も出て来ている印象深い言葉があります。それは「主は告げられた災

いを思い直される」（３，１３，１９節）という言葉です。これは、どんなに警告されても頑として罪を悔い改めようとしないヨヤキム王やユダの人々とは対照的な、人格的で柔軟な態度だと言えます。

わたしたちは「神」に対してどのようなイメージを抱きやすいでしょうか。よく、キリスト教（ユダヤ教、イスラム教も）の神は超越的で唯一絶対的な存在だが、日本やギリシア・ローマの神々は人間臭く、自然現象などへの恐れから由来している、などと言われます。しかし、それらは両極端で曖昧なイメージであって、すくなくとも聖書に証言されている神とは異なります。

主なる神は、「法則や原理」ではありませんし、それらの創造者であってもそれらに縛られることはありません。また変えられない「宿命」を定めておられるのでもありません。わたしたちをご自身の「かたち」すなわち交わりの相手として創造された愛なるお方です。それゆえ人間が、自由の中からどのように応答するかによって、神が態度を変えてくださる可能性に開かれています。

今日の箇所は、ユダ王国滅亡（前５８６年）寸前の危機時代から２０年ほど前のヨヤキム王の治世の初めまでさかのぼって、これまでの罪悪がいかに大きかろうと、もし悔い改めるならば「彼らの悪のゆえにくだそうと考えている災いを思い直す」（３節）とまで告げられています。つまりここでは単なる可能性ではなく、神の確かな「意志」として語られた点に注目すべきでしょう。そこまで神が譲歩されてもなお、ヨヤキム王とユダの民は悔い改めて来なかったではないか、という残念な事実がここで確認されているといえるでしょう。

わたしたちも、せめて数十年前までの歴史を、また自分の人生を父母や祖父母ぐらいまではさかのぼって、主なる神の前でどのように省みるべきか、大きな示唆を与えられているのではないでしょうか。

それぞれ複雑な事情や、いろいろな立場によって見方が違ってくるものだということでは済まされません。すべてをご存知であり、正しく裁く方であり、思い直してくださる方である主なる神の前でどうなのか、ということです。（了）